

「文脈」で考える！ 情報リテラシー教育

大阪大学附属図書館(総合図書館)
利用支援課専門職員
上原 恵美
euehara@library.osaka-u.ac.jp

平成21年度 中国四国地区情報リテラシー教育担当者研修会
広島大学中央図書館ライブラリーホール
平成22年1月21日(木)



本日の内容

- はじめに
- ある大学図書館の情報リテラシー教育
- 「教育の文脈」のなかで考える情報リテラシー教育
- 教員と図書館員
- 学習支援の仕掛け—ラーニング・コモンズを例に
- 関連する話題の提供
- おわりに—「図書館」の枠内で考えるな！



1

1 はじめに

■ 統計で見る大学の「情報リテラシー教育」

「学術基盤実態調査」(大学長宛に送付、調査対象は752大学)では、平成19年度実績で9割以上の大学が「情報リテラシー教育」に関する授業を行っている。

○情報リテラシー教育の実施状況



2

1 はじめに

■ 「学術基盤実態調査」での情報リテラシー教育

- 学内LANを利用するために必要な操作法やルール
- 倫理・マナー
- 学内のシステム、アプリケーションソフトウェア、データベース等の利用方法やルール
- 情報セキュリティ
- 情報検索技術
- その他情報技術一般

なんだか、違和感を感じませんか？

3

2 ある大学図書館の情報リテラシー教育

■ 図書館独自の講習会実施

- ・ 新生対象の図書館オリエンテーションや各データベース毎の使い方など。
→ データベースや電子ジャーナル等の費用対効果の維持・上昇を図る企画でもある。

■ 授業との連携

- ・ 平成11年度後期以降、共通教育科目「情報科学演習」(年間約40クラス)の1/15回を図書館員が担当する。
- ・ 平成12年度以降、法文学部経済学専攻(夜間主含め6クラス)の基礎演習IまたはIIにおいて2~4コマを図書館員が担当する。
- ・ 教員からの要請によるオーダーメイドの講習会、出前講習会の実施。
→ 意識が高い教員のため、毎年要請される率が高い。
- ・ 受講生のほとんどが1年生のため、文献入手法の初歩程度までを講義する。

4

2 ある大学図書館の情報リテラシー教育

■ 授業の工夫(その1): 授業の支援として

- ・ 教員との事前相談を行い、実施内容にシラバスの内容を反映させる。

教員と協働した事例

「政策情報基礎演習」法文学部総合社会システム学科政治学専攻 1年生必修授業(56人)

- ・ 面談とメールによる打ち合わせ
- ・ 教員は米国流の「大学初年時教育」の「writing」の授業をイメージしていた
- ・ 「図書館ツアー」ではツアーと図書館職員による講義、課題実習を組み合わせで3コマ実施。
- ・ 多人数なのでグループ分けをして、PC実習室、ツアー、閲覧室での課題実習を教員、TA、図書館職員が同時進行した。
- ・ 「図書館ツアー」の3コマ以降の授業中でも、実習時間は適宜、教室と図書館の行き来を教員が指示していただきたい

5

2 ある大学図書館の情報リテラシー教育

【スケジュール】	
12月	開校
4月 18日	(13) イントロダクション：大学で学ぶスキル
4月 22日	(24) 図書館ツアー①：調べもの①図書館の本
4月 29日	休日
5月 6日	休日
5月 13日	(30) 図書館ツアー②：調べもの②図書館の論文
5月 20日	(41) 図書館ツアー③：調べもの③研究資料の活用検索
5月 27日	(52) 情報リテラシー
6月 3日	(63) 論文
6月 10日	(74) まとめる
6月 17日	(85) 実践する
6月 24日	(96) レジューミ
7月 1日	(107) プレゼンテーション①
7月 8日	(118) プレゼンテーション②
7月 15日	(129) ライティング①
7月 22日	(140) ライティング②
7月 29日	(151) ライティング③
8月 5日	(162) ライティング④

課題がはっきりしている
学生のモチベーションが高い授業



図書館側も対応しやすい

図書館職員担当部分では、下記の課題のためOPACの読み方(書誌情報の読み方)、引用文献の意味と意義の解説、学術雑誌のブラウジングの意義とブラウジングの方法、機関リポジトリと本学の研究者総覧の紹介、レファレンス資料(冊子やWebの辞事典・人名辞典など)の使い方について、資料を用意した。

【課題 2】 当世文学・国語関係書に就いて、あなたが学びたい内容を念頭に研究図書(1冊、論文を1本、入手しない。その上で、①入手した文献の書誌情報、②概要、③その文献を元に、さらにどのような文献を入手すると、知識を深めることが出来るかと、以上をまとめてレポートする。

【課題 3】 当世文学関係書と国語関係書のうち、ひとつを選び、その紙質が紙質の良い論文を入手しない。その上で、今度は逆にその著書・論文を検索するとしたら、どのような検索方法が必要だろうか。指定されるキーワードを10個挙げなさい。

6

2 ある大学図書館の情報リテラシー教育

- 授業の工夫(その2):「考える講義」を目指して
 - ・ 教員との打ち合わせが十分に取れない科目
 - ・ 学生により、事前の知識や技能の格差が大きい科目

学生のモチベーションが低くなりがち



図書館側は対応しにくい

7

2 ある大学図書館の情報リテラシー教育

- 授業の工夫(その2):「考える講義」を目指して

対応しにくいになり・・・

学生に考えさせる「つぼ」を模索

「情報科学演習」 全学共通教育科目 年間約40クラス

- ・ 出版年により配架場所が違う→OPAC検索結果を出版年順に並べ換え→検索結果の**出版年の項目を読み取れる**ようにする
- ・ ある著者の著作一覧を表示させて、どのような分野を専門とする人物かを**推察させ、文章化**させる
- ・ WebcatPlusの連想検索でキーワードを拾う→自分で思いつかなかったものをメモさせる→論文検索でも同じキーワードで検索させる→同じテーマで複数の情報源を検索させ、それぞれの**情報の特性に気づかせる**きっかけを作る
- ・ 課題の詳細な条件は、プリントに記入せず口頭で追加する→講師に集中させ**メモを取らせる**

8

3 でも何かが違う・・・

- 今後の課題

- ・ 図書館側でのリテラシー教育内容の体系化と「見える化」
- ・ 授業との連携の実質化

具体的な状況：図書館のがんばりは認知されているが・・・

▶ 図書館の授業の取り入れ方について、**教員側も戸惑っている**

- ・ 同じ学生が別の授業でも図書館員の同じ内容の授業を受講している。
- ・ 大学のカリキュラム体系の混乱に、図書館の情報リテラシー教育が巻き込まれているのではないかと。

▶ 授業の1コマにもかかわらず、全体における図書館担当部分の**位置づけが不明確**

- ・ 授業の全体像や目標が不明確なまま図書館員が授業を実施している。
- 教員、図書館員双方の責任
- 「コンピュータ・リテラシー」のカリキュラムの中に位置づけられていることへの違和感(例：共通教育「情報科学演習」の1コマ)
- ・ 教員と図書館員との間で、議論を重ねていく必要があるのではないかと。

図書館からよい提案をするためにも、「教育」を知らなくては・・・

9

4 状況を変えたい

- 「教育」の文脈に図書館が参加するために

- ・ 体系化と「見える化」のために**ガイドブックを作成**する
 - 教員と図書館員で、初年次や共通教育で使えるガイドブックを作成する。
 - e-learningのコンテンツを作り、それを授業に取り入れてもらう。
- ・ リンクリポルバを導入して知った「**ナビゲーション**」の**効用**
 - 一定型の調査スキルは、「ナビゲート」することにより利用者に**考え方のプロセスを意識化**してもらえる可能性があるのではないかと。
 - 断片的に存在する情報や情報源を、「見える形」で「意味あるもの」として繋げていく「ナビゲーション」の手法を、情報リテラシー教育でも取り入れられないかと。



「教育」あるいは「学び」の文脈の中で
図書館の情報リテラシー教育を「見える化」をする
必要があるのではないかと。

10

5 「文脈」で考える情報リテラシー教育

- 具体的に「文脈で考える」とは・・・

- ・ データベースなど図書館資料の利用法、操作法を教授することが情報リテラシー教育か？
 - No.
 - 「断片的」な情報リテラシー教育から脱却したい
 - 以前は、学習(学術)情報は図書館に偏在(「**かたよって**」存在)していた。
 - しかし、今や図書館以外にも偏在(「**あまねく**」存在)し、しかもその数や種類、形態が多種・多彩。図書館以外にも専門の情報機関が存在し、それが一般にも認識されるようになった。

- ▶ 図書館の外(具体的には「教育」や「学び」)を知り、その文脈のなかで図書館を位置づける必要はないか！

11

5「文脈で考える」情報リテラシー教育

■「教育学」をかじってみる

●「TeachingからLearningへ」

- 以前のリテラシーは「読み書き、そろばん」
- 脱工業化社会においては「批判的思考、説得的な表現、問題解決力」

今後着目すべきことは

- ✓利用者を中心に据えた調査
- ✓とりわけ、学生の学習がどのように行われるかの把握

「学習すること」について知ることなしには、「図書館を利用した学習の効果を測定する」という**図書館評価**には、対処できないだろう

S Bennett. Righting the balance, Library as Place: rethinking roles, rethinking the space. (CLIR publication, No.129) Washington D.C.:CLIR, 2005, p11. <http://www.clir.org/pubs/reports/pub129/bennett.html>
永田治樹「大学における新しい「場」インフォメーション・コモンズとラーニング・コモンズ」『名古屋大学附属図書館研究年報』2008, 第7号 p3-14

12

5「文脈で考える」情報リテラシー教育

●学習理論によって「リテラシー」を考える

伝統的パラダイム Teaching	構成主義的パラダイム Learning
記憶すること	理解すること
思い出す	発見する
すべてに適応する一つ	あつらえ; オプションに富む
望ましくないものを取り除く才能	育成し、探し当てる才能
繰り返し	乗換えと構成
事実の取得	事実+概念枠組み
個別の事実	体系だった概念的スキーム
伝達	構成
教員＝主人で指揮者	教員＝専門家でメンター
固定した役割	可動的役割
固定した教室	可動、変更可能な教室
唯一の場所	多数(様)の場所やスペースタイプ
累積的な評価	累積的かつ発達の評価

Malcolm Brown. Learning Space. Educating Net Generation. EDUCAUSE 2005, p.12.1-4. <http://net.educase.edu/ic/library/pdf/pub71011.pdf>

13

5「文脈で考える」情報リテラシー教育

■図書館が情報リテラシー教育にかかわる論点

- 大学全体で展開する情報リテラシー教育のなかで、次のことが問われる
 - いかなる部分を担うのか
 - いかなる部分を担うべきなのか
 - いかなる部分を担うことができるのか

野末俊比古「情報リテラシー教育と大学図書館：「利用教育」から「指導サービス」へ」『図書館雑誌』2008, 102(11) p762-765

■そもそも学習支援は難しい……

- 「教育」あるいは「学習」は、主体性の問題がある
- 主体的に行動できるような状態になっているか
- 指導するレディネスが学生に確保できているのか

永田治樹「講演 インフォメーション・コモンズ ラーニング・コモンズ」『ラーニング・コモンズ：学びの場の新しいカタチ』(大阪府立大学 No.25)2009.1, p1-18

14

6 教員と図書館員

■教員の役割の変化

- 「教育」から「学習」へパラダイムシフト
- 教員の役割は、知識教授者からメンターへ
- 課題設定でさえ、学習者の発見にまかせる

■図書館員はどうか 新しい名称の図書館員の出現

- リエゾン・ライブラリアン liaison librarian
→学部学科との仲介・連携をミッションとする
- ブレンディッド・ライブラリアン blended librarian
→カリキュラムデザイン、インストラクション技術についての知識や技能を持つ

- ➡危機感：教育の文脈の中に統合されなければ
図書館は大学の中でマージナル（周辺）な存在になるのではないか

- ➡レファレンスサービスの重要度増：サービスの見直しと意識改革を伴う

15

文脈としての情報リテラシー教育： 7 学習支援の仕掛け

■「文脈」と考えるからこそ「ラーニング・コモンズ」

- 従来のリテラシー教育が苦手だったこと
 - 受講者のモチベーションの喚起
 - 受講者は知識を現実の課題（レポート作成等）で活かせていない

- ラーニング・コモンズでの情報リテラシー教育
 - ラーニング・コモンズは「学習」にフォーカスしたコンセプト
 - 「学習」を促進する仕掛けの一つとして実施されるリテラシー教育
 - リテラシー教育をより実践的に展開できる

■大学の学習支援の協働の場 ラーニング・コモンズ

- ➡大学のミッションに対する貢献度を高めるチャンス
- ➡他部局と共同で各種GPなどで資金獲得し、ラーニング・コモンズ開設を目指す図書館あり

16

文脈としての情報リテラシー教育： 7 学習支援の仕掛け

■大阪大学のラーニング・コモンズ(2009年6月開設)



← 試験前には大盛況、入館者数も増えた



特に利用法を指導したわけではな
いが、ディスカッションは当然の
ごとく行われている

17

話題提供

8 米図書館員による 情報リテラシー教育担当者ワークショップ

■「学習とは?」「教育とは?」から始まるワークショップ

- 学生を取り巻く情報環境・情報ニーズを考える
→ 講師は、「学生は普段どのように情報収集しているか?」から始まり、情報リテラシーの定義を確認しながら、「学生はどのように学習するか?」「図書館が『学習』に重点を置くとうなるか?」などの質問を受講者に考えさせながら、ワークショップが進められた。

■「教師としての図書館員」

- インストラクショナル・デザイン(Instructional Design)の手法
→ 「カリキュラム」とのコーディネート役としての図書館員
→ 教授技能の開発と行動計画作成
- 教員と協働するための知識とトレーニング

「ライブラリ・コネクト・ワークショップ2009 情報リテラシー教育」(主催:エルゼビア・ジャパン(株) 実施日:2009.Dec.)
<http://japan.elsevier.com/news/events/ic2009/index.html>
<http://japan.elsevier.com/news/newletters/newletter200912.html>

18

話題提供

9 図書館は「単位の実質化」を支える 一組織となれるか?

■1単位あたり45時間の学修量を確保(大学設置基準)

- 講義時間以外の学習時間
→ 講義時間は最低でも1.5時間の確保が必要
→ それ以外の時間について、図書館は何が貢献できるか。
→ 図書館の教育的位置づけを強調できるチャンス
- 「単位の実質化」の協働パートナーとなれるか

■グローバル化を求められる大学

- 日本の教育力の信用性
→ 洋書の学生用図書購入費は増額される大学が多い。でもそれだけでグローバル化対応と言えるか。
→ 図書館の情報リテラシー教育周辺でもグローバル化が起こるか?

中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて(答申)」(文科省 2008.12)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyoku/chukyo/kenkin/1217067.htm

19

10 おわりに

■「断片」から「文脈」へ

- これまで、主に図書館内部の事情による情報リテラシー教育を実施してきた
→ データベース等の高価な学習資源の費用対効果の向上を目指して、また図書館の存在感を示すために。
- 今後は、大学全体の「教育」の文脈の中で図書館の情報リテラシー教育を考えてみる必要がある

■それぞれの「文脈」のもとに

- 各大学の教育の文脈を考えるなら、その大学に相応しい情報リテラシー教育のありかたがあるはず
→ 教育資源、協働できる人材、組織は大学によって異なる
→ 各大学の目標が異なる
- 試行錯誤しながら、たゆまない図書館サービスの開発を!

20

ご清聴ありがとうございました

参考文献 先に挙がっていない文献のみ

「5分でわかる学習理論講座」第5回:実践を通じた学習のなかで知識を獲得する「認知的徒弟制」 東京大学大学院 情報学環 ベネッセ先端教育技術学講座「BEAT」メールマガジン「Beating」第16号 2005.9.22
<http://www.beatiii.jp/beating/016.html>

D Beagle; 三根慎二訳。「ラーニング・コモンズの歴史的文脈」『名古屋大学附属図書館研究年報』2008, 第7号 p25-34

上田直人、長谷川豊祐。「わが国の大学図書館におけるラーニング・コモンズの事例研究」『名古屋大学附属図書館研究年報』2008, 第7号 p47-62

竹内比呂也。「総論:デジタルコンテンツの彼方に図書館の姿を求めて」『情報の科学と技術』2007, 57(9) p418-422

大阪大学。「クローズアップ ラーニング・コモンズ:TeachingからLearningへ ReadingからLearningへ」『阪大Now』2009, No. 112 p4-7

美馬のゆり、山内祐平『「未来の学び」をデザインする:空間・活動・共同体』(東京大学出版会 2005)



21